

卒業後すぐに依頼され、明治29年(1896)10月より、臨時葉煙草取扱所建築部技師となった。この時の上司は妻木頼黄である。大阪土木株式会社造家技師や工手学校造家学科教授など多数の仕事に携

わっていた矢橋であるが、明治35年(1902)からは大蔵技師を兼任し、米國博覧會賛同準備委員として訪米、同39年(1906)には大韓帝國政府度支部大韓醫院の建築工事臨時監督として訪韓、翌年

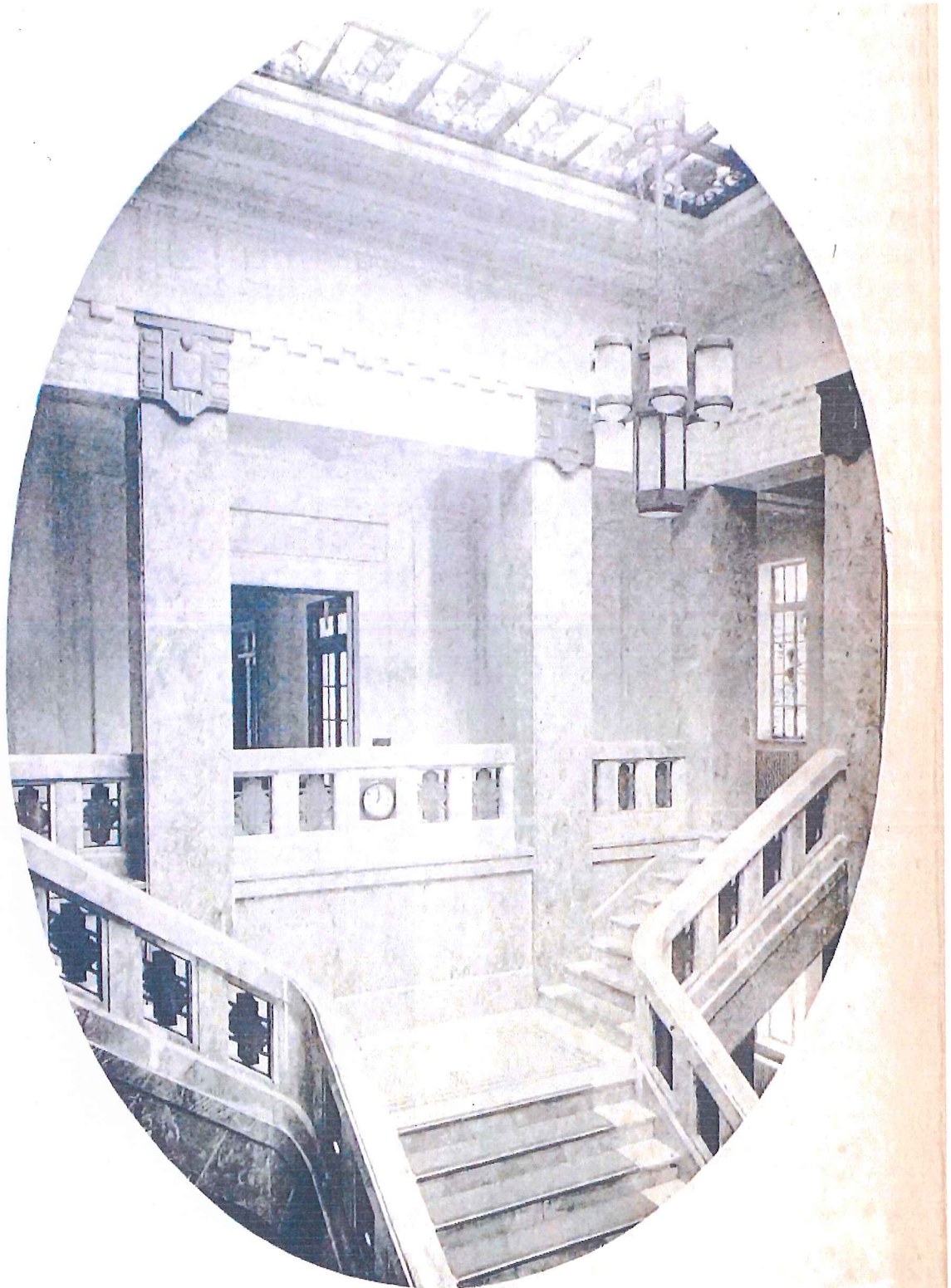


図2-8 ステンドグラスの入った階段ホール(『岐阜県庁舎新築落成記念写真帖』所蔵 岐阜市歴史博物館)

に再度訪韓するなど、国内のみならず他国でも精力的に活躍していた。明治40年(1907)には、千葉県庁舎と県会議事堂の設計および監督を担当、同43年(1910)議院建築準備委員会事務、大正2年(1913)大蔵大臣官房営繕課長、同7年(1918)臨時議院建築局工営部長、同8年(1919)大蔵大臣官房臨時建築課長、同12年(1923)臨時営繕局工営部長など様々な要職を兼任・歴任し、とくに部下の大熊喜邦や吉武東里と共に国会議事堂建設に尽力したことで著名な建築家である。このように矢橋は、明治期の妻木から昭和初期の大熊へと引き継いだ、大正期の大蔵省営繕を支えた中心人物と言える。

また大正期というのは我が国の建築物が煉瓦造から鉄筋コンクリート造に変わっていく、大きな転換期でもあった。その時代に矢橋は造家学科の同級生である遠藤於菟と並んで、大正12年(1923)の福井県庁舎、大正13年(1924)の石川県庁舎、岐阜県庁舎、北海道拓殖銀行小樽支店など、日本における本格的な鉄筋コンクリート造建物の黎明期を飾る作品の設計に関わっていく。

岐阜県庁舎建築顧問については、大正11年

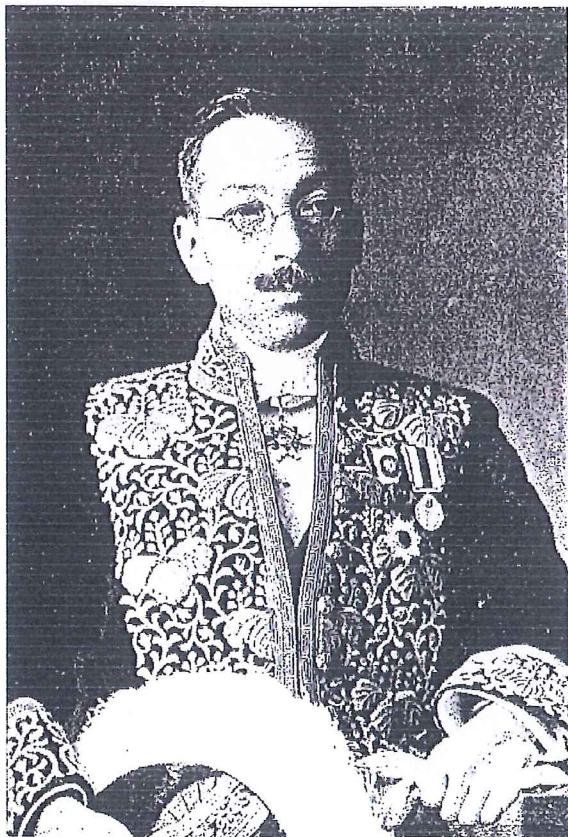


図 2-9 矢橋賢吉 (建築雑誌) 1927. 7.

(1922)に嘱託されている。また、矢橋大理石商店を創業した矢橋亮吉は従兄である。

もう一人の建築顧問、佐野利器は、明治13年(1880年)山形県に生まれ、明治36年(1903年)に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後、同大学院にて架骨構造の研究を続ける傍ら、同大学工科大学の講師も勤めた。翌年4月にはサンフランシスコ地震の被害調査を実施している。大学での教育・研究と共に、明治42年(1909)からは同大学の臨時建築係長兼営繕係監督を兼務した。翌年から主に鉄骨構造の研究のためにイギリス、アメリカ、ドイツ、イタリアに留学し、大正3年(1914)の帰国後に記された「家屋耐震構造論」で工学博士の学位を受けた。同書は、日本における耐震構造学の礎を築いた名著として名高い。一方で実際に建設される建築の構造設計も多く手掛けており、東京駅がその代表例である。関東大震災後には、東京市建築局長として区画整理事業を実施、耐火建築の普及に努めており、耐震構造の分野だけでなく震災予防を視野に入れた都市計画、防災工学の分野でも功績を成した建築家である(図2-10)。



図 2-10 佐野利器 (建築雑誌) 1956. 12.

大正13年(1924)の岐阜県庁舎建設において「設計及監督」を担当した清水正喜については、これまで岐阜県の主任技師とだけ知られていた。日本建築学会の会誌『建築雑誌』の大正11年(1922)3月号の会員動静欄に「任岐阜県技師 叙高等官七等」、同12年(1923)5月号の転居欄に「岐阜市下新町四四」(下新町は県庁舎が建設された司町の北方1km足らずの場所)と記載されていたことから、清水は県庁舎新築のために岐阜県へ派遣された高等官であること、大正11年(1922)から岐阜県庁舎の設計に携わり、翌年6月の工事着工に合わせて現場近くに移り住んでいたことが判明した(図2-11)。さらに、同誌大正14年1月号の転居欄には「赤坂区檜町一〇」(現在の東京都港区赤坂)と清水の居住先が記され、岐阜県庁舎の竣工後に岐阜の地を離れて転居していたことも分かった。清水が関わった他の建築や、次の赴任先については不明である。

県庁舎新築に重要な役割を果たしたであろう人物がもう一人いる。それは、『岐阜県庁舎新築落成記念写真帖』にて、清水の横に岐阜県の営繕課長(土木課長の誤りか)として顔写真が掲載されている松尾国松である。松尾は、大正10年(1921)3月からは岐阜県土木課長、同12年(1923)3月からは岐阜県地方課長を拝命していた。前出の『八十年

の回顧』には、土木課長就任直後に、暗くて製図作業に不具合のあった旧庁舎の部屋を改造した所、「土木課だけが明るくて通風のよい部屋になった。それが庁内でやかましい問題になった。他の部課長が承知しなかった。それが県庁舎改築の導火線となったのである。」といった出来事が記されている。これは大正10年(1921)に県庁舎新築の気運が高まった隠れた要因の一つと理解できる。

#### 参考文献

- 『岐阜県史通史編近代 上』岐阜県、昭和42年
- 『岐阜県写真帖』明治42年所蔵 岐阜県立図書館
- 『岐阜市街新全図』明治22年所蔵 岐阜市歴史博物館
- 『八十年の回顧』松尾国松、中部日本新聞社、昭和32年
- 「岐阜県庁舎新築工事概要」大正13年
- 『岐阜県議会誌 第一巻～第五巻』岐阜県議会、昭和55年～59年
- 『建築雑誌』日本建築学会
- 「岐阜県庁改築理由及沿革並改築計画ノ概要」『岐阜県議会誌』所収
- 『明治の建築家・妻木頼黄の生涯』北原遼三郎、現代書館、平成14年
- 『岐阜県庁舎新築落成記念写真帖』清水写真館、大正13年11月、所蔵 岐阜市歴史博物館



図2-11 設計技師清水正喜と営繕課長(土木課長)松尾国松(『岐阜県庁舎新築落成記念写真帖』所蔵 岐阜市歴史博物館)

表 2-3 現存する戦前の道府県庁舎

年代	竣工	庁舎	設計	構造	意匠	文化財分類	現在の用途等	
明治	12	1879	三重	清水義八	木造	擬洋風	重文	博物館明治村に移築
	21	1888	北海道	平井晴次郎	煉瓦造	洋風	重文	「北海道立文書館」
	35	1902	兵庫	山口半六	煉瓦造	洋風	登録	建設当初から残るものは建物外壁のみ
	37	1904	京都	松室重光・一井九平・久留正道	煉瓦造	洋風	重文	京都府庁旧本館
大正	2	1913	長野	野田六次	木造	洋風		移築し部分保存、「長野県自治研修所」
	5	1916	山形	田原新之助・中條精一郎	煉瓦造	洋風	重文	山形県郷土館「文翔館」
	5	1916	山口	武田五一・大熊喜邦	煉瓦造	洋風	重文	妻木頼黄・矢橋賢吉
	13	1924	石川	笠原敏郎・矢橋賢吉	RC造	洋風		正面保存「石川県政記念いのき迎賓館」
	13	1924	岐阜	清水正喜・矢橋賢吉・佐野利器	RC造	洋風		「岐阜総合庁舎」
	14	1925	鹿児島	曾禰中條建築事務所	RC造	洋風	登録	移築し部分保存、「鹿児島県政記念館」
	15	1926	大阪	平林金吾・岡本肇	RC造	洋風		府庁として使用中
昭和	3	1928	群馬	佐藤功一	RC造	洋風	登録	「群馬県庁昭和庁舎」
	3	1928	神奈川	小尾嘉郎	SRC造	帝冠様式	登録	県庁として使用中
	4	1929	愛媛	木子七郎	RC造	洋風		県庁として使用中
	5	1930	山梨	県・佐野利器	RC造	洋風		県庁分庁舎として使用中
	5	1930	茨城	置塩章	RC造	洋風		耐震補強復元工事「茨城県三の丸庁舎」
	5	1930	徳島	県・佐野利器	RC造	洋風		移築し部分保存
	7	1932	宮崎	置塩章	RC造	洋風		県庁として使用中
	10	1935	富山	大熊喜邦	RC造	洋風		県庁として使用中
	12	1937	静岡	中村與資平	RC造	帝冠様式	登録	県庁として使用中
	13	1938	愛知	西村好時・渡辺仁	SRC造	帝冠様式	登録	県庁として使用中 免震化工事済
	13	1938	栃木	佐藤功一	RC造	洋風		移築し部分保存、「昭和館」
	13	1938	和歌山	増田八郎・内田祥三	RC造	洋風		県庁として使用中
	14	1939	滋賀	佐藤功一・國枝博	RC造	洋風		県庁として使用中

RC造：鉄筋コンクリート構造 SRC造：鉄骨鉄筋コンクリート構造

重文：国指定重要文化財(建造物) 登録：国登録有形文化財(建造物)